

政治は現在と未来に向かい、 歴史問題は歴史家に任せよ

東京大学法学部 北岡 伸一 教授

歴史認識研究会（座長 森下俊三・小嶋淳司 両代表幹事）は、日中歴史共同研究委員会日本側座長で東京大学法学部の北岡伸一 教授を招き、「日中歴史問題の捉え方～日中歴史共同研究の動向を踏まえて～」と題して講演会を開催した。以下要旨。

日中歴史共同研究の取り組み

今の日中歴史共同研究の端緒は、2005年に、私が国連大使として日本が安保理改革に取り組んでいるときに、中国の猛烈な日本批判に遭遇し、町村外務大臣が北京に飛んで、日中歴史共同研究を申し入れたことにある。その際には、中国側は乗ってこなかったが、昨年10月に安倍首相と胡錦濤主席が会談し、歴史共同研究をやることになった。政治の中から歴史イシューというトゲを抜き、歴史の問題は歴史家が議論するというようになった。

昨年、12月26日北京に行って、第1回目の会合を開いたが、日中の歴史学者が対話をする際の枠組として、日中の長い2000年の歴史を取り上げ、戦争の時代だけに焦

点を当てないという合意をつくった。次の会合は3月に開き、ゴールを2008年、来年の6月にレポートをほぼ完成させることに定めるとともに、両側からみたそれぞれの時代の通史を書き、問題が対応するように提案をした。近代については、南京事件だけを取り上げるといったように、特定の問題だけにハイライトすることなく、全体の流れの中で取り上げる。両方の論点が噛み合っていて、距離のあるものを作ることに合意した。

新しい時代の外交のあり方

世界の外交は、ある意味で、新しい時代に入っている。これまでの外交は、具体的な価値、生命、安全、富を求めていたが、戦争がない時代になり、イメージの外交になった。歴史家は、現在の価値基準を昔の判断に持ち込んではいけないと言っているが、高級な理屈がまかり通るような時代ではなくなった。現在は、今の価値基準で過去を切り分けている。何か不用意なことを言ったら、これで揚げ足をとってやろうというメディアがいるところで外交をやらなければいけない。歴史問題は学者に任せ、政治は、現在と未来に向かって、何かを言い続けるという方向に考え直さないといけないと思う。

